「賞金三十円？　其の乞食に？」

「へエ、乞食に賞金三十円を言渡す検事（けんじ）さんも一寸風変りでせうが、言渡すと直ぐに三人の賞金を勢州が綺麗（きれい）サッパリと渡して了（しま）いましたのですよ。検事さんも一寸呆（あき）れましたらうよ」

「勢州が他（ほか）の二人分をも出してやりましたかネ」

「えエ、夫りやア思ひ切つたもんですよ」

「ふうーん、然（さ）うかなア」音無（おとなし）は溜息（ためいき）を吐（つ）

モロ五

201

いた。

「旦那、御案内致しませうか其所（そこ）ら辺（へん）を。」

男は煙草入（たばこいれ）を腰（こし）にさした。

「では案内して下さい。」音無（おとなし）は洋杖（ステッキ）の把手（トツテ）に載せて居た顎（あご）を少し横に踊らせて言つた。

二行アキ

二人は小い谷を渡つて砂渚伝いに絶壁（ぜつぺき）の方へ出て行つた。屏風（びやうぶ）のやうに出（で）つ張（ぱ）つた岩蔭（いはかげ）に黒い物がチラと見えたので、音無（おとなし）は好奇の

眼を睜（みは）り乍ら急ぎ歩（あし）で甚所（そこ）へ近寄つ乍（て見）ると何百種か判（わか）らない種の小い布片（きれ）を縫合（ぬひあは）した天（てん）幕様（とやう）なものを張つた中で二十歳位な若い女が小石で巧みに築き上げた竈（へつひ）で御飯を炊（た）いてゐた。ブル、ブル、と白い泡（あは）が中から吹いて来て、真黒い蓋（ふた）が少しづゝ撥（は）ね上げられてゐた。

「おうい親爺（をやぢ）さんは？」と男は首を天幕（てんまく）の中へさし込むやうにして言つた。

「昨日（きのふ）から串本の市へ行きました。」女は懐ましく端然（きちん）と筵（むしろ）の上に坐つて答つた。

ガラス使用

「あの娘（こ）は孝行者でなア」男は感心さうに言つた。

十四五ある向ふの洞（ほら）の中からも炊煙（けむり）が細く立昇つてゐた。音無は少しく氣味悪いやうな感じを懐（いだ）きながら男の後れ跟（つ）いて洞の前へ行つて見ると、其所（そこ）には七十ばかりの老人と、五十恰好（かつかう）の老婆と三十七八の髪を茶色くクル〳〵に剃（す）つた坊さん姿の男と三人が、竈（へつひ）を鳩（あつ）めて、何かムシヤ〳〵と食べてゐたが、音無の姿を見るや否や、竹の皮包（かはづゝみ）のやうなものを茶色

◆數二〇（神楽坂下山田製）

の古ぼけた風呂敷の中へ隠（かく）して了（しま）つた。

「おい安珍（あんちん）！　どうぢやナ？」男は三尺ばかり離れた所から訊（き）いた。安珍（あんちん）と云はれた男は頻りにペコ／＼と叩頭（おじぎ）をしてゐた。

「安珍（あんちん）ですか？　夫れは名ですか？」音蔵は小声で尋ねた。

「なァに清姫（きよひめ）の聟（むこ）さんぢやさかい、然（さ）う云ふんですよ。」

「清姫？　夫（そ）れは又た可笑しい名ぢやないか。」

ガラス使用

「矢張り（やつぱ）私と同じ日高川のあの辺やで、皆ながら清姫々々って云ふんですよ。」船の婆アさんが清姫です。」男は洞穴（ほらあな）の戸を指（ゆびさ）した。

音無はザクリ〱と砂を踏（ふ）み乍ら洞穴の間（ま）近まで歩（ある）いて行つたが、老婆の顔を見た時、思はず「あーッ！」と声を立てようとした。しかし強（し）いて〱両手で心臓（しんぞう）を抱えるやうにして凝然（かつ）と其の顔を見詰めてゐた。

「お清、お清、たしかに然（さ）うだ。然うに違ひない」。自問自答し~~なから~~つゝ少しく顫（ふる）へ乍ら

ガラス使用

立つて居た音無は、「婆アさん、あんたは日高の何所（どこ）ですか。」と問うた。

「へゝゝ何所（どこ）でもありやアせんのう。」

「何村ですかつて言ふんですよ。あんたの産（う）まれた所は？」

「へゝゝマア奥の方です。あんたらの知らん所（とこ）です。」

老婆は薄氣味（うすきみ）悪（わる）い笑ひをして音無の質問（しつもん）から逃（に）げよう逃げようとした。

「おい、清姫どん、」言うたら善（え）エがやない

中綴二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

か、此の先生も矢張り日高奥のお方ぢやよ。」

男は叱（しか）るやうに言つた。

「へ、、嘘（うそ）ばアかり……又た私を欺（だま）すんぢやらう。チヨツチラ甚の手にやア乗らんのう私（わし）らア。」

「嘘（うそ）を言ふもんか……」男はチエツ！〳〵と舌（した）打（うち）をした。吉蔵は少し身体（からだ）を屈（かが）めるやうにして洞の上へ上半身を入れながら、

「婆アさんは寒川村（さうかはむら）のお清さんぢやらう。長志（ちやうし）と云ふ家に居つた……」

二〇（神楽坂下山田製）

208

「違（ちが）ふのう、へ、、、」相變らず苦笑ひ（にがわらい）をしてみた。しかし長志（ちやうし）と云つた時、老婆の眼の色が異常（いじやう）に讃りたので、いよ〳〵然（さ）うだと断定する事が出来た。

「お婆アさん、僕はあんたと話して見たい事があるんだから、又た此所（こゝ）へ来ますよ。夫れからネ、あの晩雛楼（ばんからう）へ……田保さんの晩雛楼へお出でなさい、明日の晩は彼所（あすこ）でお話しがあるから……」

「さうかのう、私らアもう、あんた方の話

を嘲られて何にもなるんぢやア無いし……」

「そんな事を言ふもんぢやア無い、婆アさん！」と男は窘（たしな）めるやうに言つて、「私が伴つれてつて上げるよ。」

安珍（あんちん）は傍（そば）から「有難う御（ござ）います」と言つてペコ〳〵と頭を下げた。

「私も行きます。宜しう御（ござ）いませう？」と最前（さぜん）から黙つて坐つてゐた老人は嗄（しわが）れ声で言つた。

「宜（よろ）しいとも、爺（ぢい）さん！此の婆アさんと御一緒にお出で下さい。」

中〇二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

吾妻は後（あと）の洞穴は見ないで「有難うございました」と男に言残して、サッサと元来（もとき）た路の方（ほう）へ取って返した。男は「左様なら」と云って洞の前に其儘（そのまま）立って居たが、吾妻が芝（しば）生の所へ来て振返って見た時、男は腰を屈めて両手を膝頭（ひざかしら）に突いて何だか話し込んでゐるやうであった。

雑木林（ざふきばやし）の蔭へ入って路傍（みちばた）の石に腰を掛けた吾妻は青葉隠れにキラ／＼光る海を見ながら自分の子供時代の事を追憶（ついおく）してみた。

一行アキ

210

頭の真中を二銭銅貨程の大きさに剃（す）り抜いて、周圍（ぐるり）を鋏ん揃つた河童（かつぱ）のやうな罌粟坊主（けしばうず）にした信次は母さア、此所（こゝ）から見とつてやるさか獨りで行けよ。何にもオトロしイ物は居りやアせんさか……己と叔母（をば）のお熊に言はれて御用（ごよう）の多和（たわ）といふ丘から棕梠畑（しゆろばたけ）の中へポツ〳〵と藁草履を引摺（ひきづ）りながら入（はい）にある細路つて行つた朝な〳〵の自分の姿があり〳〵と見えた。

夏の朝だつた。信次（しんじ）＝吾亀の名＝は、お熊

ガラス使用

211

を見返り〳〵淋しい薄暗い路を唯つた一人で歩いてゐると、下手（しもて）の大きな柿の樹の所から棕櫚（しゅろ）の葉を動かし乍ら一人の男が上つて来た。男はヒヨイと信次（しんじ）の方を見た。信次は其の男の顔を知らなかつた。

「おう、信ぢやないか、音無（おとなし）の信次（しんじ）ぢやらう、坊は？」

「はア。」信次は恐々（おそ〳〵）答へた。

「学校へ行くんか、えらいなア。」

「…………」信次は男の顔を見上げた。

「信！　俺（おれ）を知つとるかい？」

「知らん……」

「俺（おれ）は與助（よすけ）ぢや、学校から帰るなら、祖父（おぢい）さんに與助に出逢（であ）つたと言へよ。」男は腰の煙草入（たばこいれ）から二銭銅貨を二つ取出して信次に呉れた。そして「~~田~~俺（おれ）は今お前の朋輩（ほうばい）の孫四郎ン許（とこ）に居るさか、遊びに来いよ。」と言ひ足した。

信次は夕方学校から帰つて其の二銭銅貨を祖父（ぢい）さんの與兵衛に渡し乍ら今朝（けさ）の出来事を詳しく話したのであつた。其時始めて信次は庵

半紙二〇（特製矢下山田製）

れ落ちると直ぐ與助といふ他の丈の短い口の大きなゴト蟇（びき）に似た男の所へ貰はれて行つた事件が自分の歴史の一部分になつて居るのだといふ事を知つた。

與助は其後段々信次に一朱二朱の小使を貰れた。信次は與助の家へ行つて其所の孫四郎＝與助の兄の子＝と朝から晩まで遊んだ事もあつた。

其頃であつた、與助がお鶴（つる）といふ妻を置去（おきざ）りにしてお猪といふ女と大和の十津川へ逃げ

信次は如の

手に手を取つて

て十六年も帰つて来ないうちに、お鶴が狂人（きちがひ）になつて死んだのだといふ事を、誰に聞くとも無く聞いて知つてゐた。のみならず甚のお鶴が信治を抱（だ）いてゐとりやア私（わし）の子かやア。と言つて村の誰彼（たれかれ）に見せびらかしたといふ話も聞いてゐた。だから信治は子供心に、お清を悪い女だと思ひつめてゐた。

或日孫四郎と二人で山から花を採（と）つて帰ると、お清は死物狂ひ（しにものぐるひ）になつてきやア〳〵と泣いてゐた。孫四郎の父親（てゝおや）や母親がヤア〳〵言

つて仲裁して居た。与助~~は~~鼻を紅くして眼に涙さへ浮べて顫（ふる）へてゐたが、何を吐（ぬか）しくさるんなら、此奴（こいつ）メ！と言つて平手でお清の頬（ほつ）ぺたを思ひ切り打（ぶ）ん毆（なぐ）つた。頭體（づうたい）の大きいお清は散（さん）ぱら髪（がみ）ぴしやり！とになつて与助に武者振（むしやぶ）りついた。そして与助は組敷（くみし）かれて圍爐裏（ゐろり）の縁（ふち）で頭をゴツ〳〵と小突（こづ）かれた。家の中には恐ろしい混亂（こんらん）の空氣が充ち溢（あふ）れた。

　信次は産れて初めて大人（おとな）の喧嘩（けんくわ）というものを見たので、ホロ〳〵涙を流しながら緒をも

216

一行アキ

其後も時々此の喧嘩の事を想ひ出して、自分が

見ずに家（うち）へ逃げて帰つたのであつた。そして若し~~も~~今にあんな彼様な夫婦~~の中に自分が養子に出~~をお父さん、お母アさんと言はねばならないのであつたらせまれ~~坊や~~も如何（どう）しようね、といふやうな事を考へて見た事もあつた。其の大喧嘩の後で間も無く與助夫婦は又た何所（どつ）かへ行つて了（しま）つて村へは帰つて来なかつたのであつた。

の自分の本籍、夫木は與助の子となつてゐる。あのお清が與助の妻なら、取りも直さず

ガラス使用

ぢつと眠と眼と閉ぢてゐると

自分は彼の女を母だと言はねばならない事になる。「彼の女は自分の事をちつとも知らないだらう」が、斯う思つた時音無（おとなし）は何だか言ひ知れない恐しさに襲はれて来た、大きな黒い手が闇の中から現はれて牧師のガウンを引剥（ひきは）いで、そして乞食の襤褸（ぼろ）を被（き）せに来るやうに感じた。

「襤褸（ぼろ）で宜い、襤褸を着て乞食に侍近するのが僕の使命かも知れない！」と心の中で叫んで不圖眼を開けると四邊（あたり）がきうく〜として

きつと　め　あ

ガラス使用

218

眼が眩（くら）むやうに感じた。

「乞食の子！乞食の子！」と音亀は呟（つぶや）くやうに言つて起上つたが、一二間蹌踉（よろめ）くやうに歩（ある）いて「若し自分が乞食の群（むれ）に入（はひ）つたなら？」といふ氣分が蝕る眞面目に心の何所（どつ）かに閃（ひらめ）いた。夫れと同時に彼は天幕の中で竈（かまど）の前に愼（つゝ）ましやかに坐つてゐた円顔（まるがほ）の色の白い乞食の娘を心の中で明瞭（はつきり）と見た。

「馬鹿な！どうかしてゐる？」と音亀は憤（ふん）激（げき）したやうに洋杖（すてつき）で路傍（みちばた）の雜木（ざふき）の枝を思ひ切

ガラス使用

り殴（なぐ）つた。小指程の小い枝が白い肉を見せながら幹（みき）から引裂（ひきさ）かれてブラ／＼とぶら下つた。

　さうだ乞食も一つの商賣だ、光明遍照（かうみやうへんじやう）十（じつ）方世界（ぽうせかい）！　何と大きな言葉ぢやないか。全（まる）で宇宙を包む程の言葉だ。こんな立派な言葉を唱つたら人の門（かど）に立つて一握りの米、五厘銅一つを貰ふのが乞食なら、乞食の慈悲なのと説教して天國こしらへてから金を貰ふのも乞食だ、金襴（きんらん）の袈裟法衣（けさころも）で檀家（だんか）から金を集めるのも乞食、皆（みん）な乞食だ。襤褸（ぼろ）を着るか金ピカ

ガラス使用

二行アキ

と着るかの相違だ。乞食々々！　皆な乞食！

斯んな事を思ひ乍ら田圃（たんぼ）の所まで上つて来た音無は振返（ふりかへ）つて雑木林（ざふきばやし）の方を見た。夫れは孝行なといはれる乞食の娘が其所へ上つて来るのではないかといふやうな薄（うす）い期待（きたい）があつたからであつた。しかし何とはなく急に気恥（きはづ）かしくなつて洋杖を無闇（むやみ）に振廻し乍ら坂路を駈け降りた。

七

墓場の所から車道（しやだう）へ出て町の方へと急いで

ガラス使用

歩（ある）いて居ると、左手の小い丘の上から「おうトイ。」と呼ぶ者があつた。見れば妙な印度人の着物のやうなものを着て居る田原（たはら）であつた。「来給へ、其の畑の所から上つて来給へ、俥（くるま）の置いてある所から……」

「はア、参ります。」音吉（おときち）は急いで丘（をか）の上に駈け上つた。其所には小い家があつて、縁側（えんがは）に五十恰好（かつかう）な男と田原とが腰を掛けて話してゐた。家の後には細長い牛小屋があつて、大きな小い牛が門（かんぬき）の間から頭を突出してゐた。

牛や

四五疋

「何所（どこ）へ行つて来ました？」田舎は二ユ二

又笑つたら訊（き）かれ。

「御手洗（みたらし）の瀧へ……」

「いゝ景色（けしき）だらう？」

「景色も宜（い）いですが……今日は彼所（あすこ）の洞穴（ほらあな）に居る連中と話して見たいと思てますてネ。」

「彼所（あそこ）には坊目（きりめ）といふ面白い乞食の親方（お[illegible]かた）が居るよ。」

「名前は聞きませんでしたが、甚の親方に逢つて種々（いろ〳〵）と聞いて来ました。」

ガラス使用

「あれはなか／＼面白い男だよ……」と云ひながら田島は立つて主人の方を振向（ふりむ）いて、「久（く）保君（ぼくん）、此の方が音無君……今度教会へ来た牧師です。」と言つて、音無を紹介（しやうかい）しながら、「音無君、久保君も洗礼（せんれい）を受けた事のある人です。am（アム）ぢやア無くつてwas（ウオス）の方だよ。卒業したんぢやネ。」

田島は無邪気に笑つた。久保は眼の縁（ふち）に小（こ）皺（じわ）を一杯寄せながら、「田舎教会も（あんまり）学校のやうなもんですから、卒業するのが晴れですネ

半紙二〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

みみ54

私らも（も）苗ろ教命ーは出ませんが洗礼を受けたんといふ事は、どうしても忘れません。夫れに印龍敎のお蔭（かげ）を蒙（かうむ）つた事は死んでも忘れられん程澤山ありますから！……亜米利加（あめりか）で山の樹を伐（き）りに行つて居た時、ストライキが起いて我々日本人はストライキの仲間つは入（はい）られず、とえつて御きはならず生命（いのち）から〳〵に山を逃げ出した時、何処も〳〵土人に殺されると思ふ恐ろしい事に出会（でくは）しましたが、何とかいふ~~樹~~小い町へ‖もう名も忘れて了つたが‖出て来た時、

字數二〇〇（神樂坂下山田製）

救世軍（サルベーシヨン）が太鼓（たいこ）を打（た）つて軍歌を歌つて居るのを聞いた時私は思はず「サルベー……サルベー……」と云つて友達の腕（うで）を掴（つか）んで揺（ゆす）りましたよ。」久保は両手で物を掴んで振る真似をした。

「ふん、夫れから如何（どう）したのかね。」田宮は笑ひ乍ら聞いた。

「最（も）るサルベーシヨンに出逢つたら生命は大丈夫だと思つて、其の士官に理由（わけ）を……変（へん）な英語で話すと早速其の町の鑵詰（かんづめ）商（や）へ世話

ガラス使用

をして居られましてネ。其所（そこ）には支那人が三十人ばかり居ました。私は兎に角其所で会話なる事になつて入り込んだが、面白くないので三日目にシスコの市へ帰りましたがネ……其時は基督教の有難サ……野蠻（やえ）の力といふものを本當に見ましたネ。」

音無は久保の話をも大変興（きょう）ある話だと思つた。「四無（うつひ）さうですか……」と云つて考へ込むやうに偏向いた時、自分が神学校で習つて来た辯證論（べんしょうろん）だとか汎神論（はんしんろん）だとか一神論（いっしんろん）だとかい

ガラス使用

ふものが果して実地（じっち）の修道に何（ど）れだけの遣（つか）ひ途があるだらうかと思はざるを得なかつた。今日濱で出会（であ）つた乞食（こじき）の親方でも、此の牛乳屋の久保でも確（たし）かに実際の世間を見て来た人だ。そして生きた神学や哲学を握つて居る。斯（こ）んな連中に我々の説教が何の効果があらう？などゝ考へた。

二人（ふたり）は牛乳を一合宛馳走なつた。久保（くぼ）が自分で焼いたのだと言つて、種んな形（かたち）した大きなピスケツトを出して来た。三人は四方山（よもやま）の

228

二行アキ

話を三十分ばかりもしたが、田宮と音無とは軈（やが）て其所（そこ）を辞して~~外れ~~紅々（あかく）と権現山の上に美しい光りを投げて居る夕映（ゆふばえ）を見ながら丘（をか）を降（お）りた。

「おうい、先（さき）へ~~帰~~行つて中学校の所で待つて居て呉れ、彼所（あすこ）まで歩くから、、、、」田宮は丘の中腹から大きな声で呼んだ。俥屋（くるまや）は二つ三つ叩頭（おじぎ）をしてゴローゴローと空俥（からぐるま）を曳（ひ）きながら中学校の方へ行つた。

ガラス使用

音無は途々（みちみち）今日の出来事を詳しく田宮に語つた。黙つて聞いて居た田宮は立停（たちどま）つて、

「しかし夫れは唯ゞの戸籍面（こせきめん）に其の與助といふ者の名が書かれてあるだけで、親でも子でも何でも無いぢやないか。況（ま）して其の後妻（ごさい）といふのは君と何の關係（くわんけい）も無い~~關係~~赤（あか）の他人ぢやないか」と云て音無の顏を覗（のぞ）き込んだ。

~~中宥[illegible]むるやうに言つた~~

「夫れは勿論（もちろん）他人です。私は彼（あ）の老婆と母親だと云つて敬はねばならぬと思ふのではあ

半紙二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別

りませんが、実に奇遇（きぐう）でしたから隨分（ずゐぶん）私の魂は脅（おど）かされました。

『夫れは然（さ）うだらう、しかし君のやうな甚（じん）樣な尊い境遇（きやうぐう）と經驗とを有（も）つて居てこそ、『我が母親が兄弟とは誰（たれ）ぞや！』といふ言葉の意味が本當に理解（りかい）出來るんだネ。』

『私も最前（さいぜん）から然（さ）う思ひました。我が父我が母？ 夫れは『誰（たれ）ぞや？』といふ大きな疑（ぎ）問（もん）に包まれたものです。』

『さうすると君は君の父親（てておや）を知らないんで

すネ。」

「いゝえ、知つてゐます。父だ子だとは名（な）乗（の）らないが人間は能く知つて居ます。しかし全然（ぜんぜん）何の関係もありませんナ。寧（むし）ろ私の敵（かたき）です。」音無の言葉は挨拶（きんばち）のやうに強がつた。

「敵？、それは如何（どう）いふ理由（わけ）で？、」

「私の母に私といふ、~~私生児~~者（もの）を孕（はら）まして置いて足を挙（あ）げて蹴（け）散らかして逃げたんでせう。母は其後（そのご）どの位ゐ私といふもの、為めに人知れず苦しんだか知れません、母は子を産んだ

中館二〇（神楽坂下山田製）

みふて

のでは無くつて恥（はぢ）を産んだのです。私は七八つの時、母と小梅といふ‖同じく私生児を産んだ‖女と二人（ふたり）の会話を聞いた事がありました。母はどうかして私を血の塊（かたまり）のまゝ流し出さうとして焦慮（あせ）つたらしい。高い石垣の上から跳（と）んでも見たらしい。唐辛（たうがらし）を煎（せん）じて死ぬやうな思ひで（大小を）飲んでも見たらしい。しかし何の因（いん）果（ぐわ）か私といふ子ものは母の胎内（たいない）を離れないで、グン〳〵成長（おほき）くなつて達者で出て来たんでせう。恥辱（ちじよく）の塊（かたまり）が産れて来たんです。斯うして

別

産んで貰つた子供でも親に對して御恩があるんでせうか……』音無は憮然（ぶぜん）として外方（そつぽ）を向いた。

『夫れは先（ま）ア、産んだのが親か、養つたのが親かといふ問題から解決しなけりやア解（わか）らない大問題だよ。』

『然うですか……』と音無は餘りに軽く點頭（うなづ）いた。

『井神先生！　これから何方（どちら）へ？』と掛茶屋に居た車夫が突如（だしぬけ）に言つたので、田宮は吃驚（びつくり）したやうに

半紙二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

234

、白おう、其所に居たんか、これから一寸遊野地の晩雞樓（ばんかう）まで行つて呉れ、直ぐ用事は濟（す）むんだから……」と言つて俥に乘り乍ら、白では吉龜君失敬（しつけい）します。明晩は晩雞樓で說教をして下さい。相手を乞食だと思はずに、最（さい）前（せん）の話のやうに、ありふ商賣人（しやうばいにん）だと思つて說教して呉れ給へ…………」と

白家の俥（くるま）を見送つて居た音龜はコツリ〳〵と歩（ある）き出だしたが、何だか頭の中に重（おも）い冷（つめ）たい石でも容れられたやうで直ぐ妝飾館に帰る氣

中質二〇（神楽坂下山田製）

になれなかつたから、ツイ畑途を通つて時子の家の前に出て行つた。

十二〇（[illegible]坂下山田製）

ガラス使用

濟

2337

宿命（四）

空想　三十八枚

追伸　二百三十七枚

二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

2387

空想

音無（おとなし）は久し振で時子を訪問した。

「マア、暫（しばらく）でしたワネ、さア何卒（どうぞ）お上り下さいまし、たった今田原さんが俥の上からお声をかけて下さいましたのよ。私其時何だか貴方（あなた）のお出でになるやうな豫感（よかん）がありましたの、久し振で又た文学談でも承りませう。」

「近頃は文学談でもありません。文学よりも、もっと私には研究（けんきゅう）しなきゃアならぬ問題

[illegible]二〇（神楽坂下山田製）

な人？　でなきやアイブセンのブランドの中に出るGerd（ガアルド）のやうな娘？」

音亀は俯（うつむ）向いて黙つてゐた。睛子は甘（あま）へるやうに肩を揺（ゆす）ぶり乍ら、

「どうして黙つてらつしやるの？　面白いお話つて如（どん）何なお話？　言つて頂戴（ちやうだい）よう。」と言つて雪のやうに白い手を机の上に伸（の）ばして白魚のやうな可愛い指尖（ゆびさき）をピク／＼と動かした。

音亀の頭では小い三畳敷の乞食小屋一継（つぎ）々の天幕（てんと）（しかも甚の横になつたり縦（たて）になつたり

別
6

かありますから。」

「社会問題でせう。」

「先アでくなもんですなア。モーゼが何(ど)う
だのエリヤが斯(か)うだのと言つてばかり居たつ
て詰(つま)らないですからね。」

「本当ですワね、血の出るやうな生きた問題が
目の前に澤山あるのですからネ。」

「さうですよ、社会を知らず人生を知らな
いで傳道も何も出来るものですか。」

「私も然(さ)う思ひますワ。だから私、小説を

読むのよ。」

音無は無遠慮（ぶえんりよ）にも最（も）う玄関へ上つてゐた。

「さア何卒（どうぞ）お二階へ……何卒（どうぞ）お先へ……」

時子は両手の指を胸（むね）の所で組合せて少し身体を後（うしろ）の方へ反（そら）して嫣然（にっこり）と笑つた。音無の頭には最前（さいぜん）の乞食の娘が判然（はつきり）と見えて来た。えして乞食の娘に較（くら）べて何といふ時子の美しさだらう？、と思つた。しかし夫れと同時に時子のキラ／＼とした髪飾（かみかざ）り、指に光つてゐるダイヤ入の指環などが一種の軽蔑（けいべつ）の資料（たね）ともなつ

半紙二〇（神楽坂下山田製）

別 6

ガラス使用

た。

「さ、お掛け下さいまし、今日は何地（どちら）へ？」

「御訪問？」

「いいえ、御手洗（みたらい）の滝へ山窩（さんくわ）の連中を訪問しましたの……。」

「山窩（さんくわ）？あの物気（もののけ）みでせう。」

「そうです。大変面白い話も不思議な話もありましたよ。」

「さう？。どんな不思議なお話？」「ゴーリキーの小説に出て来るチエルカツシユのやう

別
6

そんな汚（きた）ない場所ま

した縞（しま）や絣（かすり）が未だ目に残つて居る」焚火（たきび）で黒く煤けた岩穴、から突然斯んな美しい部屋、しかも總ての男性を悩殺（のうさつ）せねば置かないといふやうな美しい愛嬌（あいきょう）のある時子の前に拉（つ）れて来られた自分を怪まずには居られなかつた。夫れは餘りに激（はげ）しい變遷（へんせん）であつたから。

「音無（おとなし）さん、あなた大變~~萬~~情あれて居らつしやるワ、お氣分でもお悪くつての、どうしてそんなに黙つてらつしやるの？」

「いゝえ、どうもしないのです。一寸外の

事を考へてゐましたのです。失敬しました。さ、文学論でも承りませう、謹聴します」

「何ですか？ そんなに徼かれ乾燥（はしや）ぎなすッて……」と峠子は滴（したゝ）すやうな愛嬌（あいきやう）を見せ乍ら、「音無さん、あなたは誰（たれ）の小説が一等お好きですか」

「僕は矢張りツルゲーネフだネ。貴女（あなた）は？」

「私？ 私はゴーリキーなの、牧師さんには叱られるか知らないけれど、本當にゴーリキーが好きなの、小説って云ふより寧（むし）ろ論文

特製二〇（神楽坂下山田製）

別
6

別
6

でせう。

田　私なんかにはカール・マルクスの資本論（キャピタリズム）なんか讀む根氣（こんき）がありませんから、ゴーリキーの小説をマンリシズムだと思つて讀んで居ますの、本當に面白いですわ。だけど私、ゴーリキイを唯物論者（ゆゐぶつろんじや）だとは思ひませんのよ。匸

田　去りやア宿命的（しゆくめいてき）の唯物論（ゆゐぶつろん）者が社會組織（しやくわいそしき）を呪（のろ）ふといふ所に論理的の矛盾（むじゆん）はあるでせうが……匸

田　もう宜いの、もう議論は御免下さい。マルクスだのキャピタリズムだのを持ち出した私のが惡かつたのです。生意氣（なまいき）に一寸甚樣（えん）な事を言

ガラス使用

別
6

つて見たのよ、御免下さいネ。私、今日あのテレサとポレスの話を讀んで本當に感心して了（しま）つたの。」

「どんな處に感心なすつたのですか。」（音樂は氣乗（きの）りのしないやうな返事をした。）

「テレサは世間に對手（あひて）にして呉れるものが無いので、ポレスといふ空想（くうさう）の戀人を拵（こしら）へて、甚男に宛（あ）てた優しい文句（もんく）の戀文（こひぶみ）を隣の部屋（へや）に居る書生さんに代筆して貰つて、夫れが戀人の所に届いたと空想して（滿足してゐるのよ。それ）、今度は其の戀人ポレスから自分に宛（あ）てて、甘い文句（もんく）の返事が来

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60　ガラス使用

別
6

ると空想するのです。そして其の空想の通り
を又た同じ書き上人に代筆して貰つて、夫れ
を讀んで貰つてわい〳〵泣くんですワ。憐れ
なテレサは自分の話の中に美しい優しい可愛
いテレサを作り、ポレスといふ優男をも自分
の話で造つて、そして理想の戀を味つたので
すワ。私、本當にテレサに同情しましたのよ。

「面白い話です、畢竟第二の自己が第三の
自己を戀するのですわ。

「世間の多くの人達、大抵の夫婦と云ふものの

[illegible]二〇（[illegible]山田製）

は殆(ほとん)ど然(さ)うですワ。互に理想の夫、理想の妻を空(くう)に描(えが)いて、そして現実(げんじつ)の似ても似つかない者を蔑したり虐したりしてゐるのですワ。私の知つた人に斯(こ)んなお方があるの、夫れは御自分の作つた和歌を奥さんのお名前で新聞へ投書して、其の和歌が新聞へ載(の)つたのを讀む刹那(せつな)だけ、自分の妻(つま)も斯(か)ういふ歌人であるといふ幸福を味ふのです。今一人(ひとり)のお方は亡くなつた奥様の事を世にも稀(まれ)なる賢婦人であつたかのやうに書立て、夫れを變名で新聞へ投

ガラス使用

別
6

書して、夫れが掲載（けいさい）されたのを讀んでは追憶（ついおく）の中に亡（な）くなつた奥様を意して〳〵ホロ〳〵と泣きなさるのですワ。だッて其のお二人共に會つてお話（はなし）してみると夫れは〳〵本當に優、しい善人（グードマン）ですの、ゼントルマンよ。つまり其人達は詩人や賢婦人を奥様にも有ちたかつたのでせうが、夫れが實現（リアライズ）しなかつたので、空想の奥様を心の中で創造（クリエート）なすッて、私既は詠（よ）めなしッても實際賢婦人で無くッても現在の奥様を理想化（アイデアライズ）して居なさるんですワ。（私の旧

別
6

みちし

の刈穂の庵（いほ）のとまをあらみ……し」ッて歌ガルタの文句を口吟（くちずさ）みなすッても、夫小が「……君がうなじを捲（ま）かんには餘りに細きわが腕（かひな）かな」ッて云ふやうに聞えるんですワ。金色夜叉（こんじきやしや）や不如帰（ほととぎす）を仮字（かな）を辿（たど）つて讀んでゐても、夫れがクロイチエル・ソナタやウエルテルの悲しみに見えるんですワ。（なんだけど）私、そんな詩人肌（はだ）の人を讀んで居るやう[illegible]を羨（ちう）とも軽蔑（けいべつ）しませんワ。実際身も心も美しい立派な殿様を、奴隷（どれい）か玩弄物（おもちや）のやうに思つたり、御自分の肉を満

今錄二〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

足せしむる機械（きかい）になさる人達よりも、とんなお方（かた）~~は~~の方（はう）が百倍千倍高尚ですワ。私、其様（そん）な人達を尊敬しますの。

音楽は何時の間にか時子の話に釣込（つりこ）まれて了つて、『こりや面白い、自分の頭で勝手に優しいの可愛いのと決めてるんですネ』と言つた。

『だつて音楽さん、然（さ）うぢやア無くつて？私共は矢張り空想（くうさう）の人を愛する程度で満足しなけりやアなりませんワ。夫婦は一體（いつたい）なり

（神楽坂下山田製）

別 6

ガラス使用

別
6

って聖書にも書いてはありますが、夫々別々の人間ですもの、夫れが一つになれるなんて思ふのは迷信でせう。いとしい可愛（かわ）いって他（ひと）を愛して居る心算（つもり）でも、夫れは矢張り斯んなに優しい人なの、彼様（あんな）に可愛い人なのって、御自分の頭で空想（くうそう）して作り上げた空想の他（ひと）を愛してるんですワ。矢張り對照（たいせう）は空想よ。客觀的に實在してる當人と空想してる人とは似ても似付かぬ別の人かも知れませんワ。

音無（おとなし）は晴子の議論に一理があると思つたか

別
6

2-5-7

ら黙つて點頭（うなづ）いた。

「だから私、すつかりテレサに同情して了（しま）つたの、ね、晉龜さん、聞いて下さいましョ、私は斯（か）う思つてるの……どうせ人間の戀つてものは空想で愛し合つてるんですから、私、もう一生結婚なんかしないで、心ゆくばかりに戀の甘（あま）さを味つて見たいの。」

時子は机に身を投げかけるやうにして、両手を前の方に伸して組合した指を上に下に動し乍ら、顔を左の肩先（かたさき）に押付けるやうにして

二〇（神樂坂下山田製）

可愛いパッチリした眼で音無を眼（ぢつ）と見た。音無は恍惚（うつとり）として晴子を見詰めてゐたが、不図（ふと）自分の體内を恐ろしい（強烈な）焔（ほのほ）が風に煽（あほ）られてゐる（燃（も）え廣ごつて）のを知つた。

「戀の甘さを味ふつて？」斯（か）う云つて音無は両手で軽く机を打（た、）つて自己の道徳心を呼醒（よびさま）さうとした。

「斯んな理屈つぽい事は言つても、矢張（やつぱり）女ですもの、本當の戀がして見たいの、肉を離れた清い〳〵靈と靈とが鎔（と）け合つて……………」

辛齢二〇（神樂坂下山田製）

別 6

ガラス使用

時子は急に耳朶(みゝたぶ)を紅(あか)くして俯向(うつむ)いた。

「時子さん、貴女(あなた)は其様(そん)な事を真面目に思つてらツしやるのですか」

音無は心を引締(ひきし)めながら斯う言つて口を一文字に堅く結んだ。其時彼の心には自分は教師であるといふ~~堅い信条が光つ~~用心(ようじん)の楯(たて)を持ち出してゐた。

「えヱ、本當にさう思つてますワ。」

「時子さん、夫れこそ大變(たいへん)な空想(くうさう)です、清い心と心~~が~~と肉と~~を離れ~~鎔け合つて一つになるなんて其様(そん)な事が出来るものですか」と音無は言葉に力を籠めて、「肉を

別
6

穢れて其様（そん）な事が、、、、、、」と言つたが其の語尾（ごび）は少くし

く顫えて居た。

　出来ると思ひますワ。私の今有つてゐる此の清い處女（しよぢよ）の心と、肉から離れた清い童貞（どうてい）の心とを一致させる事が出来ない筈はありませんワ。私は女に對して處女（しよぢよ）の心を出来るだけ長く〳〵持續けて居て欲しいと思ふと同時に、男に對しても矢張り童貞の心を一日でも多く存たして置きたいのですワ。」

　すると天下の青年を挙げて悉く比丘（びく）比丘（びく）尼（に）にして了（しま）はうと思つてるんですネ。」

[illegible]二〇（神楽坂下山田製）

別 6

ガラス使用

2×7

「いいえ、違ひますワ。昔の宗教家は人間本性の愛情を無視（むし）して滴（したた）るやうな人間の心を無残（むざん）にも干乾（ひぼし）にして了（しま）はうとしました。そんな事を私は思やしません。男でも女でも思ふ存分（ぞんぶん）愛の翼（つばさ）を擴（ひろ）げて清い〱恋を漁（あさ）るのが本当です。けれども恋と性慾（せいよく）とを一つにするのは間違ひです。ですから愛情が誤解（ごかい）されるのですワ」

「すると貴女（あなた）は性慾を汚（けが）れたものと思ってゐるのですナ」

ガラス使用

「悲惨（ひさん）だと思ひますワ、私達の生活には悲惨を少（すくな）くもなければなりません。」

「では人類が滅亡（めつぼう）するぢやありませんか。」

「えゝ、甚の御質問（ごしつもん）は高尚ですワ、しかし私、常（いつ）も考へてゐますの、女といふ女が高尚にあの恐ろしい出産といふ苦痛を意識して、そして子を産みたいといふ願望（ねがひ）から性慾を肯定（かうてい）する人が何人あるでせう。私、高尚に思ふ思子のです、人間は子を産みたいといふ希望に基（もとづ）く性慾（せいよく）以外の交りは夫れは皆な無意味です。

ガラス使用

子を欲しくない、子を産む事を恐れる人が肉慾を肯定（かうてい）するのは矛盾（むじゅん）です。世間の女が子を産んで行く、五人十人子を産んでゐる女は、皆な女の意志（いし）で、其の子を欲しくつて産んだのすでせうか。恐ろしくつて嫌（いや）で堪（たま）らないのを、強（し）いて〳〵男に産まされたのぢやないでせうか。男の腕力は女を壓服（あつぷく）する為にのみ用ひられてゐるのではありませんでせうか。男つてものは皆（みん）な暴君（タイラント）です。童貞（どうてい）を捨てゝ了（しま）ふと最（も）う愛も恋も無くなつて肉ばかりになつて了（しま）

ガラス使用

ゐます。私なんかも亡くなつた夫（おつと）とは熱烈な戀をしました。けれども本當に夫（おつと）の優しかつたのは結婚前でした。夫（おつと）は長く學問ばかりして居たので本當に童貞（どうてい）の美しさを保存してゐました。しかし結婚して暫（しばら）くすると全く暴君（タイラント）です。執拗（しつこ）くて我儘（わがまゝ）で、無作法（ぶさはふ）で、性慾（せいよく）以外に何等の清しいものを有たなくなりました。

ですけれども私は表面（へうめん）だけ其の暴君（タイラント）に屈從（くつじゆう）した風を見せて置いて、處女（しよぢよ）の心を逃がさないやうに大事に大事に保護してゐました。で

別
6

すから夫(おつと)の死んだ時は……気の毒な話ですが……私は肉の壓迫(あつぱく)から脱(のが)れた事を嬉(うれ)しく思ひました。夫(おつと)が瀕死(ひんし)の重病に罹(かゝ)つて肉體が衰弱(すゐじやく)し切つた時は既う暴君(タイラント)が優しい／＼愛の人に變化してゐました。ネ、音無さん……誤解(ごかい)なさらないでお聞き下さい」

「あなたの御論全体には贊成出来ませんが、男子が暴君(タイラント)だといふ一事だけは僕も承認します」

斯(か)う言つて音無は椅子を離れて態(わざ)と鷹揚(おうやう)に歩(ある)きながら壁の油絵(あぶらゑ)を

見に行つた。

「音竜さん、あなた、女の心を知つてらつしての、」

「さア、知つてるか知つてゐないか、僕には解（わか）りませんナ。」

「あなたは、弱い女の私に心の奥底（おくそこ）を吐出（はきだ）させながら、御自分ばかりは聖徒（せいと）のやうな顔をなすつて、勝誇（かちほこ）つて御帰りなさるんでせう。口惜（くや）しいワ。私、本当に口惜しいワ。」

「どうしての？」僕は貴女（あなた）の心を探（さぐ）りに

中判二〇（[illegible]）

263

またのちやありませんよ。勝誇つて帰るなんて、飛んでもない。」

「いゝえ、何とでも仰しやい。どうせ私のやうなお婆（てんば）はナオミさんのやうな温順しい（おとなしい）熱心な信仰のあるお方には及びません。」

晴子は廂髪（ひさしがみ）のほつれを右の手で掻上げ（かきあ）ながら涙に濡れ（ぬ）た眼鏡（めがね）を直（なほ）した。

「何を仰しやる？　ナオミさんと貴女（あなた）とを較（くら）べてどうな~~さ~~するんです？」

「お秘しなすつたつて駄目です。学校時代、

ガラス使用

一行アキ

264

には一緒にお芝居をなすつた事を能く知つてます。夫れから貴方（あなた）がナオミさんに葬して、どんなに清い愛情を捧（さゝ）げてらつしやるか、ナオミさんが如何（どんな）に苦しんでゐらつしやるか、私ア能うく存じてゐます。お許（かく）しなすつたつて駄目（だめ）ですよ。」

音無は俄（にはか）に沈鬱（ちんうつ）な顔をして俯向（うつむ）きつゝ眼を机の上を眺めてゐた。

「私、本当に貴方（あなた）に同情しますわ。」時子は

急に勝誇（かちほこ）つたやうな顔で、「ナオミさんは大伴（おほとも）堅爾（けんじ）さんと御結婚なさるの、亡（な）くなつたお兄様の御遺言（ゆゐごん）で、貴方（あなた）其事を御存知の？御存知無いでせう。ナオミさんの此頃のお窶（やつ）れにお気が付かなくつて？」

「本当にナオミさんは結婚するのですか。」

と音無は俄かに言葉を和げ、やはり「そんな話がありましたか」

「そら、御覧なさい。御心配でせう」と時子は嵩（かさ）に掛つて、愈々勝誇つた顔をした。

ガラス使用

「夫りゃアナオミさんだつて、マダ氣心を十分知り合はない堅爾（けんじ）さんとオイソレと結婚なさるお氣んはなれますまい。ですから私同情しますワ　ナオミさんにも貴方（あなた）にも。」

音無（おとなし）は默然（もくぜん）として腕（うで）を組（く）んだ。

「音無さん、貴方（あなた）は幸福ネ、仮令（よし）んばナオミさんが堅爾（けんじ）さんと結婚なさるにしても、貴方（あなた）といふ愛を捨てる為めに彼（あ）んなにお窶（やつ）れなすつたでせう。私なんか口にこそ理想（りさう）の戀な人つて云つてゐても、本當ん私を愛して下さる

ガラス使用

別 1 6 1

對手（あいて）が見付からないのよ。金張りテレサのやうに空想の戀人でも捕へて空想を樂しむ外仕方が無い憐（あは）れな境遇なのよ。」

時子は繁々（しげしげ）と音無の顔を見たが音無はまだ無言でゐた。

「音無（おとなし）さん、先刻（さつき）から失禮な事ばッかり申しましたわね、お氣に障（さ）へないで下さいまし。」

「いや、有難う。時子さん、僕も種々苦労（くらう）をしました。私（おれ）も兄に虐れた上に一家が没落（ぼつらく）して労働者の群に入つたり居候（ゐさふらふ）になつたりし

別
6
1

て、物心（ものごころ）付いてから二十年あまり、一日かつて面白い日影を歩いた事はありません。酒も飲んで見た、博奕（ばくち）も打つて見た。口で言へないやうな罪悪も数々（さくさく）犯しました。さうした揚句（あげく）の果（はて）の実数呼（よば）はりですもの、今更戀（こひ）を失ふの愛を見失ふのと、甚（え）様な事は餘り僕には問題ぢやアありません。」

「では貴方（あなた）は甚（え）様な問題には超然（てふぜん）としておいでなさるの？」

「然（さ）うではありません。~~お察しの通り八年~~私だつて、あなたに然（さ）う云

別
6
1

けれてみれば、そりやあ~~前から僕は~~ナオミさんを心の中で愛して居ましたのでせう。私はナオミさんと一緒に祈る時、神の愛を感じる事よりも、優しいナオミさんと一所（ひとつところ）に居るといふ事の喜びが遙かに大きいと思つた事もありました。~~けれども此の言葉には勿論~~~~飾りも誇張も[illegible]今日まで過して~~来ました。正

それを愚と言へば愚かとも言へませう。正

「では吾妻さん、ナオミさんを堅爾（けんじ）さんと結婚させて上げなさる？」正

「若しさうなれば非常な幸福だと思ひます。」正

ガラス使用

270

「あなたは其の結婚式を能く御同意（ごどうい）しなさるの、あなた御自身で……」

「夫れは出来ます（とも）。」

「本当に夫れがお出来の、」

「えエ、出来ますとも、僕は然（さ）ういふ運命（うんめい）を甘んじて受けます。」

「では吉野さん、仮（か）りにナオミさんよりも十倍百倍増した者を貴方（あなた）に捧げるものが~~有~~（此所（こゝ）に居）る者としたら（なら）（……其時は）吉野さん、貴方（あなた）~~は~~、何（ど）うなさいますの、」

別
6
1

ガラス使用

「俺だって血のある人間です。」

「貴方（あなた）が？　血のある人間の？　私だって矢張り血のある人間ですワ。」

「俺は殊に野性（やせい）の強い男です。俺は時々本当に下らない人間になって了（しま）います。けれども自分と自分を叱って鞭（むち）って宗教に引摺（ず）られて神に追立（おいた）てられて、漸（やっ）との事で阻路（そばみち）をも踏外（ふみはづ）さず、谷間（たにま）にも落（おっ）こちないで此所（こし）まで漕（こ）ぎ着けたのです。世間の人は俺を極悪者（ごくあくしゃ）だと云ふ。しかし俺は本当の悪人かも知れません。

ガラス使用

悪人が善人にならうと悶（もだ）えてゐるのかも知れません（僕は）根（ね）が怯る弱い男なんです。一歩踏（ふ）み外（はず）すと大変な事になる危険な男なんです。ですから睦子さん、（あなたは）僕の内に潜（ひそ）んで居る野性を呼起（よびおこ）さないで置いて下さい。僕は高壇（かうだん）で説教しながら、しかも愛する者と心中しかねない男なんです。僕は野性の強い男なんです。ナオミさんも夫れは能く知つて居て下さいます。~~ナ~~ナオミさんと僕と二人（ふたり）で麻布の廣尾（ひろを）附近を散歩した時、ナオミさんは僕~~ん~~を野性の強い

舎版二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

男など夫れとなく言はれました。夫れから僕と話してみると「肉薄（にくはく）して来るやうだ。」とも言ひました。僕は其時ナオミさんが僕の心を能うく見抜いてゐるのを小面憎（こづらにく）く思ひました。しかし天下に……天下に僕の心を本當（ほんたう）に能うく見抜いてゐて呉れる人が僕の真（しん）の友ですからね。」

「では、吾妻さん。若し私がナオミさん以上に貴方（あなた）といふ者を理解（りかい）して~~くえしてあなれ~~ ~~あなたとて~~居るとしたなら、貴方（あなた）はどうなさい

ガラス使用

ます？』

杏雅は眼を閉（と）ぢて俯向（うつむ）いた。二分三分五分と沈黙が續いた揚に、ツと座を立つて、

『イヤ、お邪魔（じやま）致しました。では復（ま）た……』

と故（ことさ）らに沈着を裝（よそほ）ひ乍ら室（へや）を出た。晴子は沈んだ調子で、

『杏雅さん！』

『何ですか。』

『今晩の御話は秘密（ひみつ）にして下さるでせうね。』

『勿論！』

ガラス使用

「左様なら、これで失礼してよ。」

時子は机に凭（もた）れて俯（うつむ）いて終（しま）つた。音羽は段梯子（だんはしご）の所まで来て暫（しば）らく躊躇（ためら）つたが、偶（ふ）ツと氣を變（か）へて彈かれた急な足でトン／＼と下へ降（お）りて行つた。

別13-60

ガラス使用

別13
60
1

(深) 276

宿命（七）

百の旅

三十六枚

通計　二百七十一枚

二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別13
60
1

二日の旅

六月十八日の朝、お常と堅爾（けんじ）とは女中のお末を伴れて京大阪見物に出掛けた。何時（いつ）までに何所（どこ）へ行かねばならぬといふ急ぎの旅で無いから、紀三井寺（きみゐでら）から根来（ねごろ）、粉川（こかは）から高野（かうや）と氣散じ（きさんじ）に二週間餘りも経巡（へめぐ）つて、到頭（とうとう）伊勢（いせ）の山田（やまだ）まで来た。

熊野の荒々（あらあら）しい男性的（だんせいてき）な海と見慣（みな）れたお常の眼には~~穏かな~~女性的な伊勢の海の平凡な景

別13
60
1

278

色が非常に氣に入つて、二見館（ふたみくわん）の別莊の二室（ふたま）
續（つゞ）きを借切つて當分保養することに決めた。
七月の半頃（なかごろ）であつた、堅爾（けんじ）が偶（ふ）つと山田の
町を散歩して居ると、「あら、太地（だいち）さん！」
と擦違（すりちが）つた俥（くるま）の上から声を掛けられた。
「やア、時子さん？」
「先（ま）ア、宜（い）い所でお目に掛りましたワ」
時子は俥（くるま）を下りて銀貨を車夫に握らせたら
「最（も）う帰つても宜（い）いよ」と言て搖て、多分の
車代にペコペコ叩頭（おじぎ）する車夫を見向きもせず

ガラス使用

に、「まア嬉しい！」と堅固（けんじ）の顔を見ながら少し首を傾（かし）げて心底（しんてい）から嬉しさうに嫣然（にっこり）した。

「晩は未だ御かかりなのよ。獨（ひと）りで淋しくッてネエ。」咲子（えみ）の声は甘へて居た。

「僕は淋しくは無いが退屈（たいくつ）した。」

「おッ母（か）さんと御一緒でせう？」

「二見館に居る（も）三週間も居るので、行く所が無くなつて了（しま）つた。」

「毎日何をしてらッしゃるの？　海水浴？」

「いゝ加減（かげん）黒いから、此上色上げする氣に

別13 60 1

ガラス使用

はなれませんや。」

「ぢやア、何をして？」

「何にも仕事が無いから、二三日前から山田の町中をノツソツ歩いて、仕方が無しの標（へう）札調（さつしら）べとして居ると、面白いネ、長尾魯鈍馬（ながをろどんま）て公證人がある。白鬚（しらひげ）長次（ちやうぢ）、黒髪（くろかみ）鳥羽太夫（とばだいふ）てな素敵（すてき）な名が發見されましたよ。今に伊勢（いせ）甚宮（じんぐう）といふやうなのが出て來るかも知れないですよ。」

「随分暢氣（のんき）だワネ。」

別13 60 1

ガラス使用

別13
60
1

「仕方無しの暢氣（のんき）ですよ。で、二三日中に
京都の方へ出て行く心算（つもり）なんです。」
「京都へ？、御用でもお有りなの？、」
「米国で同じ学校に居た男が、京都で事業
を創（はじ）めると云ふので、一緒（いつしよ）にやらうかとも思
つて居るのです。」
「さうですか、ではね、斯うして下さいナ
、私も京都の方へ行くのですから、御一緒に
伴（つ）れてツて下さいナ。今晩の終列車でお立ち
にならないの？、ねえ、さうして下さいナ。」

ガラス使用

別13
60
1

302

「さア、然（さ）うしても宜（い）いネ。」

「先（ま）ア嬉しい、一緒ん行つて下さる？、あのね、此間の晩研究でお話しした、あの續きのお話を致しますワ。」

「又た文学誌ですか、一寸あれには閉口（へいこう）しましたよ。」

「だつて、貴方（あなた）は文学がお好（す）きだと仰しやつたぢやありませんか。」

「文学は好いが、貴女（あなた）のは御説教ですもの、處女主義（バアヂニズム）とでも云ふのかね、あなたのは。」

ガラス使用

別13
60
1

『えエ、イズムですワ。私のイズムですワ。先（ま）ア甚（そん）様な事はどうでも宜いでせう。今晩伴（つ）れていつて下さるでせう。ね、堅爾（けんじ）さん。』

二人は何時（いつ）となく外宮（げくう）の外（そと）まで伴（つ）れ立つて来た。堅爾は立停（たちどま）つて、

『では斯（か）うしませう、僕は二見館へ行つて母に其事を言つて仕度（したく）をして来ますすから。』

『えエ、御待ちして居ますワ、早く入らッしやいネ。』

『お宿は？、』

別13
60
1

304

「此通りを真直ぐに行つた紙の右側の瑞穂（みづほ）館（くわん）、此亂れでせう？、」と

「あゝ、瑞穂館（みづほくわん）が、能く知つてゐます、では後程（のちほど）伺ひます。」

堅雨（けんじ）は一町ばかり向ふに客待（きやくまち）をしてゐる辻（つじ）俥（くるま）の所へ急いだ。

「屹度（きつと）ですよ、大伴（おほとも）さん。」晴子は念（ねん）を押して後から呼びかけた。

二行アキ

別13
60
1

「然（さ）う〳〵、彼の時だつた。」と堅南は獨りで噴飯（ふきだ）して了（しま）つた。

「何です？　可笑（をか）しな人ね、想出（おもひだ）し笑ひなんかなすつて」

「いや、斯（こ）んな事があつたんだよ、今から十二三年前の暑中休暇にね、僕は此（こ）宿へ泊つて二三日遊んだが、愈々帰らう、と思つて勘定（かんじやう）をすると東京までの汽車賃が足りなくなつたといふ騒ぎで、丁度七円ばかり不足だから、電報為替（でんぽうかはせ）で金七円瑞穂館（みづほくわん）宛（あて）で送れといふ意味（つもり）

別13
60
1

で「七デンカワタノム　ミヅホ」と字數を倹約した電報を打ったのです。所が返事が来ない。愚圖々々（ぐづぐづ）するうちに又た勘定が殖（ふ）えて来たので今度は長文の電報を打って十五円送って貰って東京へ帰ったのでした。後から母の手紙を讀んで見ると、七（こう）の字が「ヒ」に間違ってゐたんださうで、「ヒ殿下（でんが）綿呑（わたの）む三粒（みつぼ）」と讀んだから、サア解（わか）らない。加之（おまけに）差出人が解らぬと来てゐたから、テッキリ誰かの惡戯（いたづら）だらうと思って放擲（うつちやら）かされたのださうな。ヒ殿

[illegible]二〇（神楽坂下山田製）

別13
60
1

一行アキ

下綿呑む三粒（みつぼ）は振つてるからネ」堅爾（けんじ）に堪（たま）らぬやうに笑つた。

「落し話（おとしばなし）ネ。」睦子も顔を紅くして笑つた。

二人は食事を濟（すま）して縁側（えんがは）へ出ると其所に籐（とう）の長椅子（ながいす）があつた。

「お掛けなさいナ堅（けん）ちやん！」

「堅ちやんは弱く、だが堅ちやん時代は宜かつたナ。」

「堅ちやんは随分悪戯（いたづら）ッ兒（こ）でしたのネ。」

[illegible]二〇（[illegible]）

別13
60
1

「悪戯（いたづら）と云へば、あの頃、あなたの頭の後に五厘銅貨程のお禿（はげ）があつたわ、今でも有りますか。」

「能く覚えて居ますネ。あのお禿がやアドンナに虐（いぢ）められたでせう。死ぬまで作つて囃（はや）すんだもの。」

「さうさう何とかいふ歌だつたけなア。」

「覚えてますワ。怨骨髄（うらみこつずゐ）に徹（てつ）してますからネ。ホウ、煙草屋（たばこや）の良作さんて子と米屋の菊造さんて子がありましたネ。陣同士だもんだ

ガラス使用

別13
60
1

から、毎朝誘ひ合つて一緒ん学校へ行つたん
で揶（から）かはれたんですネ。」倦（れ）うなのよ甚歌って
のは——
時子に禿頭病（とくとうびやう）
瘦子（やせご）ん蓮根（はすね）
蓮の花いつ咲く（さ）
今日（けふ）咲く（さ）く良作（りやうさく）
さう言うな（い）
人皆（ひとみ）なきく藏（ざう）！」
「あッはッはッはッ。」と堅雨（けんじ）は呵々（からから）と笑つて、

ガラス使用

別13
60
1

310

「感心に能く覚えてますナ。だが、時と云ふものは恐ろしいもんで、甚様（えん）なタワイも無い事を云つた堅（けん）ちやんが、苟（いやしく）もバチエラアオヴアグリカルチユアーでゐらッしやるから……

……」

「さうね、米国農学士でゐらッしやるワネ。敬（けいい）意を表さなくちやア。」

「敬意を表するは恐れ入る！」

「本当よ、敬意を表しますワ。振分髪（ふりわけかみ）のお友達が、名誉の学者におなりなすッたんだもの

◆第三〇（[illegible]）

ガラス使用

別13
60
1

、私なツて面目（めんもく）ですワ。」

「最（も）う〳〵冷（ひや）かしツこなし〳〵。」と堅爾（けんじ）は手を振り〳〵「夫れよりは喉（のど）が渇（かわ）いたから茶でも飲みたい。」

「ではシトロンでも吩附（いいつ）けませうか。」

「ビーアが欲（ほ）しいネ。」

「吩附（いいつ）けませう、本當ん召上るなら……」

「飲んでも宜（い）いの？、」

「御自由ですワ、召上れ。」

「貴女（あなた）は僕がビーアを飲んでも僕を軽蔑（けいべつ）な

ガラス使用

別13
60
1

31

2

二行アキ

さらないですか」

「そんな事があるものですか」と晴子はベルを押して麦酒（ビール）と果物（くだもの）とを命じた。

三

「もう十一時過よ」と湊町（みなとまち）の停車場を出た晴子は堅爾（けんじ）に対（むか）って云った。

「梅田の驛前に新築の宿屋があるから彼所（あすこ）へ泊（とま）らう」

二人（ふたり）は湊町から車を飛ばして梅田の青山旅

313

別13
60
1

館へ着いたのは最（も）う彼此（あれこれ）十二時過ぎであつた。
三階の八畳へ案内されると「堅雨（けんじ）さん」と時子は坐に着くや否や、「此儘朝まで話しませう、種々（いろいろ）聴（き）いて戴きたい事も、貴方（あなた）からお聞きしたい事もあるから、緩（ゆつく）り話しませう、朝まで、ネ、堅雨さん。」

「だが、眠（ねむ）くは無い？」

「眠いたッて寝る事は出来ません。神様が見てらッしゃる。世間（せけん）の誤解は些（ち）とも構（かま）いませんが、お互で自己を誤（あやま）つては不可（いけませ）んワ。」

百廿四号

別13
60
1

「あなたの言ふ事は解(わか)らんナ、詰(つま)り如何(どう)しようと云ふのです。」

「あなたの清い心と私の清い心と、霊と霊とが結びつけたいのよ。」

「では、僕が君の清い心を愛する、君が僕の美しい心を愛する。……夫れッきりかい。」

「夫れが愛のエクスタシイの絶頂(ぜつちよう)ぢや無くッて？、　聖フランチエスカとクララとのやうにネ。」

「駄目(だめ)々々、僕には出来ない。そんな、そ

別13
60
1

んなセイント、ライナの所（しょ）居（あい）は駄目、我々凡（ぼん）夫（ぶ）は靈肉一如（れいにくいちによ）の第三帝國に入らなけりやア。」

「いいエ、違ひますワ。」と時子は凛（りつ）として、「肉の事を思ふのは死です、破滅（はめつ）です。私だつて凡婦（ぼんぷ）よ、凡婦（ぼんぷ）ですけど然（さ）うは思ひませんワ。私ア斯（か）ういふ戀（こひ）をして見たいの。私の火のやうに燃ゆるハートに對手（あひて）の魂を包んでしまつて、ぢいーつと抱緊（だきし）めてゐると、男の方でも燎原（りようげん）の猛火（もうか）のやうな熱情を燃（も）やして私の全身を燒盡（やきつく）さうと迫（せま）つて來るといふやうな

ガラス使用

別13
60
1

熱烈（ねつれつ）な戀をして見たいのよ。男と女とが豪の火花を散らして、其の心と心とが戰ふ所に本當の戀があるんですワ。私ネ、汽車の中であなたのお手を握ってましたでせう。あの時あなたは堪（た）へ切れない思ひを抱（りん）いてゐらしったワネ。私だってさうよ。Was not our heart burning（ワズ　ナウト　アワア　ハート　バアニング） within us.（ウイジン・アズ）＝我等の心燃（も）えしに非ずや＝エマオに旅した二人はお互ですワ。」（あの）

「あなたの言ふ事は俺れは解らない。だが、貴方（あなた）だって僕だって、肉から出来てる人間

[illegible]二〇（[illegible]下山田製）

別 13 60 1

ですよ。そんな不可能（インポッシブル）な空想を歌ってる中に、お互を陥設（かん穽）させようとする肉慾（にくよく）の地震（ぢしん）が恐ろしい地響（ぢひびき）を立てゝ襲（おそ）って来ますよ。」

「然（さ）うですとも、其の恐ろしい地震の響（ひゞき）が既（も）うあの心の底（そこ）に聞えてゐますワ。だけども負（ま）けては不可（いけませ）ん、肉に堕（お）ちた時は最（も）う樂ちやアありません。厭（いや）ッ！身慄（ぶる）ひがしますワ、そんな悲惨な事……」

「何が悲惨なんです？」

「私、去年山羊（やぎ）が仔（こ）を産（う）む所を見ましたの

[illegible]二〇（[illegible]製）

別13
60
1

318

□知己（しりあひ）の歯醫者さんの所へ遊びに行つてると、裏の小屋から氣味の悪い声が聞えるんでせう。主人と私とは提灯（ちやうちん）を點（つ）けて行つて見ました。すると藁（わら）に臥（ね）てゐる山羊（やぎ）が首だけ擡（もた）げて憐（あは）れな声で陣痛（じんつう）を訴（うつた）へてゐましたが、暫くすると袋に包まれた仔が産れました。隨分苦しがりましたが、でも産れると直ぐ袋を綺麗（きれい）に舐（な）め、臍（へそ）の緒（を）を噛（か）んでから直ぐ自分の乳を自分でちゆツ／＼と吸つて仔（こ）に飲ませる用意をしてゐるのです。人間でも動物でも變りは無いと

ガラス使用

別13
60
1

私は感心しました。所が其中（うち）に二度目のお産になつたら倩々（つくゞ）と嫌（いや）になつちまひました。二度目のは倒児（さかご）でしかも初めの子の二倍も育つてゐましたから、何度（なんど）陣痛（じんつう）が来ても容易に産れないで、苦しんで悶（もだ）えて漸（や）とこさと産れた事は産れたが、あゝ嫌（いや）な！　血がたら〳〵流れて‥‥‥夫りやア見て居られませんでしたワ。三ツ目のも矢張り倒児（さかご）でドンナに苦しみましたら〳〵、私は—あゝ悲惨だ！　何の爲に？、二と斯か、う思ひました。夫れなのに堅爾さん、